

「人間とは何か？」という問いを生政治に照らして考える
ジョルジョ・アガンベン [翻訳 高桑和巳]

私の探究は、ミシェル・フーコーが生政治に関して開いた道に位置づけられます。私がこの、権力と生のあいだの諸関係に関する探究を企てたとき、その最初の発見の一つは、というより、おそらくは真の驚きの一つは、私たちの文化においては生という概念がけっして定義されたことがなく、その反対につねに、いくつもの分割によって分節化されてきたということがわかったということでした。まるで、西洋の文化においては、生はつねに分割され切断されなければならない、というかのようなのです。ここで例をいくつかあげますが、それぞれ、時間的にも題材的にも隔たったものです。アリストテレスが『靈魂論』で生の問題、つまり生とは何かという問題に取りかからなければならなかったとき、もちろん、彼は一つも定義を与えてはおらず、生の三つの形式ないし潜勢力を区別することからいきなり始めています。私たちが植物的な生〔生命維持にかかわる生〕と呼ぶものと、感覚作用の生と、思考の生です。アリストテレスは植物はまったく好きではありませんでしたが、彼こそが、私たちの用いている植物の生ないし植物的な生という観念を発明したのです。それから幾世紀も後になって、近代フランス生理学の創始者であるビシャは、『生と死に関する生理学研究』において、やはり、二つの動物、二つの生の形式を区別するところから始めています。ビシャは、人間自体のうちで、二つの動物を区別しさえしました。一つは「内の動物」と呼ばれるもの、つまり内に生きる動物——この言葉でビシャが指していたのは、呼吸や血の循環や消化や排泄といった、生理学的な生の無意識な諸機能のことです——であり、もう一つは「外の動物」でした。こちらは、関係にかかわる生の諸機能を指します。この二つの動物が人間のうちにともに住んでいるが、その二つが一致することはない。医学の歴史においてこの分割のもつ重要性は決定的なものです。今日おこなわれている臓器移植技術をめぐる問題はすべて、この二つの生を区別することができるということを基礎としているということを考えればわかるとおりです。私がとくに興味をもったのは、この区別の政治的な含意です。ギリシア人たちは、私たちが生と名づけているものを指すのに二つの用語をもっていました。一つはゾーエーであり、ギリシア人たちはこの用語で自然的な生を指していました——後に私たちはこれを、人間、動物、神々に共通の生物学的な生と呼ぶことになりました。もう一つはビオスであり、ギリシア人たちはこの用語で、政治的に質をもった生を指していました。ところで、古典的な政治はまさしく、この二つの観念をはっきりと区別するということを基礎としていました。この二つの観念は、一方のゾーエーの場、再生産〔生殖〕の生の場である家(家には女性、子ども、奴隷が住んでいました)と、他方のビオスの場であるポリス、すなわち男たちに取り置かれた都市との区別に対応していました。さて、私の問いは、何よりもまず、この区別の目指すところは何か、なぜこの区別がなされているのか、これを理解することでした。つまり、私の立てた問いはこうでした。「なぜ、西洋の政治は自然的な生を排除するということを基礎としなければならないのか？」しかし、探究するうちに私の発見したことの一つは、この排除が内包でもあるということでした。つまり、ゾーエーとビオス、家と都市のあいだの区別は、ふだん考えられているよりもはる

かに複雑だったということです。だから、フーコーは生政治を、近代に始まる、おおよそ十七世紀と十八世紀のあいだあたりに始まるものとしましたが、私には、生政治の起源はさらにもっと古いように思えました。つまり、すでに古典世界において、自然的な生と諸権力のあいだの諸関係はさらにずっと複雑なものだということです。この点について、好きな比喩が一つあります。私は、「生政治機械」といったものがあると言っていいのではないかと思うのですが、それが、私たちの文明の最初から働き、機能しているのです。その機械の目指すところはまさしく、一つの分割によって人間的なものと政治的なものを生産するということなのです。この機械において問題となる分割は、単に、ゾーエーとビオスのあいだの分割、家と都市のあいだの分割であるのみならず、たとえば、人間と動物のあいだの分割でもあります。私は昨年、この、人間と動物のあいだの対立について仕事をしましたが、人間や人間的なものといった何かが生産されるのはこの、人間-動物という対立を通じてであると言えるように思います。ビュフォンは、「もし動物がまったくいなかったならば、人間の本性はさらにずっと不可解なものになるだろう」と言っていました。思うに、この、人間-動物という対立によってのみ人間は生産されると言わなければならないのでしょう。したがって、私の言う生政治機械は、政治的なものを生産するのみならず、人間的なものをも生産するのです。動物的な生が人間自体の内部で分離され区別されたからこそ、人間概念といったものが可能なのです。そうだとすると、人間と動物のあいだの分割が何よりもまず人間の内部を通過するのだとすると、あらためて思考しなければならない問題は、「人間とは何か？」という、人間主義の問い自体だということになります。西洋の文化においては、人間はつねに、互いに分離された二つの原則の結びつき、結合として思考されてきました。二つの原則とは、身体と魂、ゾーエーとロゴス、自然的要素と超自然的要素といったものです。私が考えるのはその反対に、私たちは人間を、選言や分離の結果として思考することを学ばなければならないということです。つまり、私たちは、二つの要素の一致や結合といった形而上学的な神秘について探究すべきではないということです。さらにずっと興味深いのは、分割と分離という、実際的かつ政治的な神秘のほうです。人間が、あいもかわらず分割と分離の場にして結果であるとする、人間とは何なのか？ こうした分割について研究をするというのは、人間がどのようなしかたで—人間から、人間の動物から—分離されてきたかを問うということです。この仕事は、さまざまな大問題や人権の諸価値について立場を明らかにするよりもずっと緊急になさなければならないことなのです。

二〇〇一年十二月二日に東京外国語大学でおこなわれた発表(当日は、高桑和巳が通訳をおこなった)

Lignes de fuite

Les livres de Giorgio Agamben traduits en français

- L'homme sans contenu* (Carole Walter, trad.), Saulxures, Circé, 1996.
Stanze (Yves Hersant, trad.), Paris, Christian Bourgois, 1981 (Rivages, 1994).
Enfance et histoire (Yves Hersant, trad.), Paris, Payot, 1989.
Le langage et la mort (Marilène Raiola et al., trad.), Paris, Christian Bourgois, 1991.
La fin de la pensée (Gérard Macé, trad.), Paris, Le Nouveau Commerce, 1982.
Idée de la prose (Gérard Macé, trad.), Paris, Christian Bourgois, 1988.
La communauté qui vient (Marilène Raiola, trad.), Paris, Seuil, 1990.
Bartleby ou la création (Carole Walter, trad.), Saulxures, Circé, 1995.
Homo sacer (Marilène Raiola, trad.), Paris, Seuil, 1997.
Moyens sans fins (Danièle Valin et al., trad.), Paris, Rivages, 1995.
La fin du poème (Carole Walter, trad.), Paris, Circé, 2002.
Image et mémoire (Marco Dell'Omodarme et al., trad.), Paris, Hoëbeke, 1998.
Ce qui reste d'Auschwitz (Pierre Alferi, trad.), Paris, Rivages, 1999.
Le temps qui reste (Judith Revel, trad.), Paris, Rivages, 2000.
L'ouvert (Joël Gayraud, trad.), Paris, Rivages, 2002.

ジョルジョ・アガンベンの著作の日本語訳

- 『スタンツェ』(岡田温司訳) ありな書房, 1998年.
 『人権の彼方に』(高桑和巳訳), 以文社, 2000年.
 『アウシュヴィッツの残りのもの』(上村忠男・廣石正和訳), 月曜社, 2001年.
 『ホモ・サケル』(高桑和巳訳), 以文社, 2003年(近刊).
 『バートルビー』(高桑和巳訳), 月曜社, 2003年(近刊).